



「反戦」打ち出す国際芸術祭あいち、 県の政策が矛盾し批判的的に

国際芸術祭「あいち 2025」のメイン会場である愛知芸術文化センターに展示された UAE 出身のアフラ・アル・ダヘリさんの作品
= 9月12日、筆者撮影

愛知県内を会場とする国際芸術祭「あいち 2025」が9月13日に開幕した。前身の「あいちトリエンナーレ」から含めて6回目、「表現の不自由展」が物議を醸した2019年以降、民間主体の運営になって2回目を迎える。今回は中東出身の芸術監督の下、世界の戦争や環境破壊などを問題提起する意欲的な作品がそろそろ。しかし、実質的に運営を担っている愛知県の「イスラエル」との連携関係を巡り、国内外から批判的になってしまっている。

◆ 中東出身の芸術監督「虐殺終わらせる」◆

「あいち 2025」は国内外62組のアーティストが参加し、現代美術やパフォーマンスアートなどの作品を披露する。芸術監督には初の海外出身者としてアラブ首長国連邦（UAE）のアートディレクター、フール・アル・カシミ氏が就任。テーマを「灰と薔薇（バラ）のあいまに」と定めていた。

9月12日に開かれた内覧会での記者会見で、カシミ氏はこのテーマが世界で起こっている戦争の「惨状、ジェノサイド（大量虐殺）、民族浄化」と重ねたものであることを強調し、「この芸術祭のプラットフォームを使って世界のさまざまな地域からアーティストを招き、同じ願

いや緊急の呼び掛けのために連帯し、虐殺を終わらせるために声を上げることが許された」などと述べた。

メイン会場の愛知芸術文化センターには、紛争地や被災地をイメージさせるブルーシートを使った日本人アーティスト、久保寛子さんの作品が4層分の吹き抜けに展示されているほか、アイヌなど先住民の文化を扱った作品などが並ぶ。全体的に、テーマと呼応して文明や社会の「光と影」を感じさせる作品が多い印象だ。瀬戸市の愛知県陶磁美術館と瀬戸市のまちなかも会場になり、11月30日まで展示やイベントが繰り広げられる。

◆ 県はイスラエルとの連携事業を継続中◆

一方、開幕以前から、この芸術祭と愛知県の事業との矛盾を指摘する声が上がっていた。

県は2022年度から、スタートアップ（新興企業）支援の一環で県内の企業とイスラエルの企業を引き合わせる連携事業「Aichi-Israel マッチングプログラム」を続けている。イスラエル

はハイテク分野で高度な技術力を誇っており、県はこの連携について「軍事とは直結しない」（海外連携推進課）と説明するが、県内のパレスチナ問題の研究者らは「イスラエルのスタートアップ文化と軍は不可分の関係にある。連携事業はパレスチナ・ガザ地区への攻撃や入植